

新科目「歴史総合」の今後に向けた分析と授業構想

吉川 政貴
教科領域コース

1. 報告の意義と概要

今年度より導入された「歴史総合」には新たな試みとそれに応じた課題がある。本報告では、新科目「歴史総合」の意義や課題を把握するため、教科書分析、教育実習での実践、授業構想の視点から研究した。具体的な素材としては大項目「A 歴史の扉」「B 近代化と私たち」を取り扱った。

「A 歴史の扉」は「歴史総合」の導入として重要な項目であると同時に、題材設定や学習方法など実践上の課題が集約されている。また、「B 近代化と私たち」は、近現代を扱う際に前時代との接続が重要になると考え、分析対象とした。令和5年度からは探究科目も始まる。生徒がより主体的に歴史学習を行えるよう、本報告での取り組みと内容を活かしたい。

2. 教科書分析より

「A 歴史の扉」は、「(1) 歴史と私たち」と「(2) 歴史の特質と資料」の二つの項目から成り、それぞれが導入として重要な役割を果たす。「(1) 歴史と私たち」では、私たちの生活や身近な地域を題材にして歴史とのつながりを実感できることを目指す。この項目では題材設定に課題があると考え、教科書分析を通して、どのような題材を扱うべきか検討した。分析からは学校に関わる題材が多いことが把握できた。学校は生徒にとって身近だけでなく、生徒の経験をベースに題材を構築できる。一方で、教科書からは地域性という視点が抜け落ちていた。身近さを実感する上では障害となるため、教科書を用いる教員には注意や工夫が必要だと考えた。「(2) 歴史の特質と資料」では、様々な資料を活用し、読み取った情報の意味や意義を考察すること、資料に基づいた歴史叙述の重要性を学ぶ。この項目では、資料の種類と視点に関する解説が課題となる。教員個人の考えが反映されやすく、指導において最も苦勞する項目であろう。教科書間で記述内容が大きく異なることも示唆的である。資料の読み方をいかに教え、身に付けさせるかは、探究科目を含め今後の歴史教育において大きな課題となるに違いない。

「B 近代化と私たち」では、前時代とのつながりに着目し、近代以前の記述内容を分析した。本報告では、西洋地域と非西洋地域に分けて教科書の記述を比較、調査したところ、非西洋地域の扱い方に課題が見られた。例えば、イスラーム帝国に関しては、叙述の起点が16世紀や19世紀と異なっていた。教科書によっては偏った非西洋認識を生徒に与えてしまうのではないかという危惧を覚えた。「歴史総合」では、日本と世界という広い範囲を扱うが、地域や出来事については今後も検討が必要であり、授業者が近現代以前の歴史を補足説明すべきだと考える。また、「歴史総合」の学習を充実させるために、他の項目においても前時代とのつながりを意識した授業構想を行うべきだと考える。

3. 教育実習での実践より

教育実習では、「B 近代化と私たち」の「(2)結び付く世界と日本の開国」を実践した。教科書の叙述に頼るのではなく、資料を活用し、当時の社会の様子を掴めるよう工夫した。生徒には授業のまとめだけでなく「問い」を書くよう指導した。これらは「歴史総合」による新たな試みと合致するが、指導する側としての課題も感じた。まず、科目新設前に多くの論者から指摘されていた授業時間の不足は明白で、資料読解の活動と解説に苦勞した。問いについても、日本と世界を複数の視点から捉えるような問いを表現できるようにしたかったが、「歴史総合」の授業の一場面だけでは難しい。発問、資料分析、現代社会との関連性を思考する取り組みは、課題に臨む主体的な姿勢や資料を読み解く力も必要なため、高等学校以前の段階からの継続性が欠かせない。「歴史総合」の実施は、歴史教育を広い視野で捉え、中高連携の重要性を再認識させる契機になるのではないかと考えた。

4. 「(1)歴史と私たち」における授業構想より

教科書分析や教育実習で捉えた課題を踏まえ、「(1)歴史と私たち」における授業構想を、二つの要素を取り入れて行った。一つ目は、教科書分析から見えた地域性の欠落に 대응するため、地域に関する記録を展示、保存する文化施設を活用することである。その狙いは、資料を活用する学習を補い、生徒に地域への興味と愛着を持ってもらうことにある。二つ目は、探究学習の導入である。「日本史探究」「世界史探究」の実践に向け、生徒が探究活動を実践する回数を増やすこと、生徒が主体的に学習に取り組めるようにしたいと考えた。

具体的には、「東日本大震災」を題材に、2021年に水戸芸術館で行われた特別展「3.11とアーティスト 10年目の想像」の展示を活用するように構想した。地域で暮らす私たちが過去の記憶をどのように伝えていくのかを課題に、歴史における資料の重要性と文化施設の役割を理解できるように工夫した。授業構想をした上で、身近な生活や地域を題材にしたのはいいが、「近代化」「国際秩序の変化や大衆化」「グローバル化」の各時代のトピックとの関連性という点では反省が残った。くわえて、文化施設を十分に活用するには、施設側との連携や準備時間の確保などの課題もあるため、今後も二つの要素を盛り込んだ「歴史総合」の実践を検討していきたい。

5. おわりに

今後は「歴史総合」の実践を踏まえ、探究科目をどのように構成し、何が課題か検討していく。歴史学習を通して、生徒が歴史を身近に感じると同時に地域への興味と愛着を持てるよう、高等学校に限らず、広い視野を持って歴史教育の研究と実践に努めていきたい。

〈主要参考文献〉

- ・文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 地理歴史編』、2019年。
- ・歴史総合検定済み教科書12冊。
- ・竹久侑ほか編『3.11とアーティスト 10年目の想像』水戸芸術館現代美術センター、2021年。
- ・井ノ口貴史「歴史総合が想定する「歴史の学び方」を批判的に検討する」『歴史地理教育』8月号、2022年、68-75頁。